

【評論】

「国境を越える言葉」および「未来世代への責任」

【実践者】

氏 名	渡邊 千恵	学校名	埼玉県立所沢西高等学校
担当教科等	国語科	対象学年（人数）	2年 3組（40名）
実践年月日もしくは期間（時数）		2023年 11月20日・21日（2時間）	

実施概要

01 実践する教科・領域

論理国語

02 単元名と単元目標

単元名：【評論】「国境を越える言葉」および「未来世代への責任」

単元目標：言葉と創造についての思考を深める・近現代の視点をもたせる

関連する学習指導要領上の目標：

今後の国際化社会においてどのような力を身に付けていくべきかを自分の言葉で述べることができる。

03 単元の評価規準

①知識及び技能	現在の自分にはない視点を積極的に取り入れ、のちの自己表現の素材として生かすことができる。
②思考力、判断力、表現力等	論理的、批判的に考える力を伸ばすとともに、創造的に考える力を養い、他者との関わりの中で伝え合う力を高め、自分の思いや考えを広げたり深めたりすることができるようにする。
③学びに向かう力、人間性等	言葉がもつ価値への認識を深めるとともに、我が国の言語文化の担い手としての自覚を深め、言葉を通して他者や社会に関わろうとする態度を養う。

04 単元設定の理由・単元の意義

〈理由〉

JICA 教師海外研修に参加し、「発展途上国」と「先進国」という区別とその上下関係の概念がいかに平面的な考え方がわかり、日本のように将来海外の労働力を必須とする国として、変わり続ける世界情勢においてそのような考え方は意味がないと学んだ。所沢西高校の生徒は普段から海外の情勢や様子を知る機会が少ない上に、子どもの頃からの教育により、「日本は途上国を助ける存在・与える存在」という考えが根強いと思われる。今回のように、身近な人間がアフリカに行き、実際に経験

したことを伝える機会を利用して、あらためて個人個人の中に根ざしている偏見や途上国に対する考えに気づき、今後どう自分のマインドをセットしていくのかを考える機会にして欲しい。また、国語科教育の大きな目標のひとつは、「自己の考えを深め、他者と共有し、表現していくこと」だと考える。閉じた問いに対して決まった答えを示していく力だけではなく、開かれた問いに対して、自分の立場を示しながら、自己の見方を言語化する能力がここでは求められ、今後の国際化に向けて英語をツールとした意思交流の能力と同じくらい大切なものと認識している。今回の大きなテーマをよい契機として、自分のことばで考え、他者にヒントをもらいながら広げ、表現するというプロセスを踏ませていきたい。

〈単元の意義〉

生徒それぞれが自身の答え、あるいはその手がかりとなる「見方」を手に入れ、授業参加者と共有することで学びを深め、まわりにつながっていける足がかりを掴むことで、今後の世界を生きるためにはどうするのかを考えることができる。

〈児童／生徒観〉

授業担当である教員に対して、授業の目指す方向を理解し取り組んでくれる、協力的な生徒たちである。クラスメイトとは大体どの人物とも会話することができるため、グループやペアワークの雰囲気はあたたかい。また、発言を促した際にはできる範囲で返してくれる。素直な生徒であるため、疑問を感じると表情が固まるし、つまらないと思われる授業では全体がすぐに眠気に包まれる。反応が直に返ってくるので授業者としても学びやすいクラスである。進路は基本的に4年制大学を目指す生徒がほとんどである。

〈指導観〉

今回の国際協力教育も普段の国語の読解力を育成する授業でも、授業者ばかりが喋って終わる聞くだけの授業ではなく、生徒と授業者が言葉を交わしつつ学びを深めていく「対話」の授業が理想だと考える。その際には授業者はファシリテーターに近い存在であることが望ましい。また、国語の授業は自分事にした概念や考えをいかに自分の言葉で語るかという、言葉を使った実技的側面が強いと思うので、今回の国際理解の授業においても、最後に「身に付けたい力」という問いを利用して、自分の意見・考え・見方を言語化する実技的要素を取り入れたい。

05 単元計画（全2時間）

	小単元名	学習のねらい	学習活動	資料など
1 本時	ザンビア フォトラン ゲージ	知らない世界を知ることで、「知る」「つながる」大切さを実感し、心の変容をはかる。	* グローバルサウスへ自分がもっているイメージを振り返る * 4枚の写真から読み取れることを考える * 今後つながっていくべき人々との関係性を予測する	ワークシート スライド (写真・動画) チテング
2	「つながる」方法への考察	手段を考え、そのためにはどのような力をつけていくかについて自身の答えを形作る。	* クラスメイトの感想・考えを共有する * 非言語のコミュニケーションについてケーススタディをする (ザンビアの方とのリモート交流・ザンビアやパラグアイの音楽やダンスでの交流動画等を通じて) * 今後の国際社会に向けてどのような力を身につけていきたいかを考える	リモート交流 小論文課題シート スライド (写真・動画) チテング

06 本時の展開（1時間目）

本時のねらい：グローバルサウスに対してのイメージを変える・「助ける側」の意識から「助けられる側・今後助け合う立場」へと意識を変える

過程・時間	教員の働きかけ・発問および学習活動・指導形態	指導上の留意点 (支援)	資料（教材）
導入 (10分)	～導入～ ☐ 【発問】ザンビアなどのグローバル・サウスと呼ばれる国々に関して思い浮かぶイメージを、学校・衣食住・街の様子的一面から問う。	☐ 数名にその場で聞き、関連のある写真をいくつか紹介。魅力的なポイントにつなげて話をする。	ワークシート スライド （写真・動画） チテンゲ
展開 (25分)	～本編～ ■ルサカゴミ最終処分場についての写真（フォトランゲージ）×4 全体像→ゴミの様子→ピッカーの後ろ姿→スタッフ4名の姿 ☐ 【発問】4枚の写真が表していることは何かを問う（4分個人思考→3分ペアワーク→全体共有・補足説明） ■アウトリーチでの写真（フォトランゲージ）×3 陸橋の上下・ペットボトルを離さない人々・パンを受け取る人々 ☐ 【発問】少年がもつペットボトルの意味	■写真が何を表しているか、ヒントのない状態で考えさせる。 ☐ 生徒の気づきを聞きつつ、アウトリーチ活動の話や、麻薬のことなどを説明。 ☐ 今後さらに他国からの手を貸してもらわないといけない点・選んでもらえる日本になっているかの懸念を投げかける。	
まとめ (15分)	☐ 【発問】ところで、日本社会ではどのような問題を抱えている？ →少子高齢化問題、経済の低迷、福祉の人手不足・・・ ■全体問いかけ 他者とかかわる姿勢は今のままでいいのか？ 非言語含めいろんな手段があるなか、私たちはもっと他者に関わっていき、知り、はたらきかけることができるのでは？（時間があれば歌や音楽動画を一部紹介）		

	～最終課題～ □【発問・記述】これからの日本とグローバルサウスの関係はどうなっていくか。また、私たちがすべきこととは何か。（感想・質問も問う）		【評価】記述シートを回収し、内容を確認。授業への積極性・何かを学ぼうとしている姿勢を評価する。
--	---	--	--

07 板書計画

なし

08 評価規準に基づく本時の評価方法

小論文課題による評価（今後の国際化の進む社会においてどのような力を身に付けていきたいか）

09 学校外との連携

Kisha さん（国内の大学院留学生、事前研修にて JICA から紹介していただいた方）

10 学びの軌跡

生徒の感想

「今までグローバルサウスと少子高齢化問題は別物であると思っていたけれど、後者が進行してくると他国から助けを求めなければいけないと思い、グローバルサウスの方が急に身近に感じてきた」「今できることが何か考えたときに募金が思いついたけど、本当に募金で助けることはできるのだろうか？そのお金がストリートチルドレンに渡ったところで、買えるドラッグの量が増えるだけじゃないのかな？簡単に答えは出なさそうです」「戦争とかしていないでそのお金をもっとこっちに回して欲しい」「国際社会についてよく考えてる政治家を選ぶ」「一人だけ特別なのはやめる」等、ザンビアでの経験を伝えたことで、刺激を受け、問いや想いを書いてくれた生徒が多かったです。また、埼玉県主催の産業フェスタでの国際理解ブースの運営や、海外留学へ興味をもってくれた生徒もいました。

11 海外研修で何を学び、どの部分を児童生徒に伝えようと思ったか

「途上国＜先進国」という世界の捉え方を変えていくべきということ。私たちはかつて途上国と呼ばれていた国々に助けてもらっており、これからさらに相互扶助・共生の必要な関係になる。そのなかで、どのような力を私たちは身に付けていくべきかを生徒と一緒に考えていきたいと思った。

12 苦労した点

研修で訪れたザンビアの抱える問題や現状を伝えることはできたが、そこから日本とつなげて「共創」的な概念まで導くことが難しく、生徒自身がその二つにつながりがもてていなかった。

13 改善点

上記については時数を増やすことで、たとえば一時間目は現状を伝えることにとどめ、二時間目に日本の現状を材料として問いを投げかけるなどして思考させ、三時間目に今後をどう生きていくべきかを各々でまとめてもらうなど、段階をきちんと分ければ対応できると考える。

14 成果が出た点

すべての生徒ではないが、一部の生徒からの振り返りで、「知ることの大切さ」や「どうすればいいかわからずもやもやするが考え続けたい」などの言葉が挙がっており、今後考えていくべき大きな問いを生徒数名と共有できたと思われる。

15 自由記述

一番の反省点は「ザンビアで起きていることは決して他人事ではなく私たちにもつながっている」という考えに辿り着けなかったことである。ここに至れば、非言語であってもコミュニケーションをとることは有効で、たとえ英語にはまだ不慣れであっても、音楽やダンスや身振り手振りなど、「わかりあおう」とする姿勢からできることはたくさんあることに触れられて、もっと話が広がったのではないと思う。そのうえでザンビアやパラグアイの交流の動画を流せば、より充実した時間にできたのではないか。

また、二時間目に特定のクラスでおこなったザンビア人のキシャさんとのリモート交流授業では、端末トラブルのほか、生徒が英語でのやりとりに対して想像以上に遠慮してしまっていたこと、席の配置を配慮していなかったことで、まわりとの相談や話し合いができず、生徒に緊張を強いた状態が長く続いてしまったことがあった。こちらについてはもっと事前に生徒と運営の相談をしておくことと、英語がわからなくても気負わず積極的に言葉を投げかけやすい雰囲気づくりをしておくべきだったということが反省点である。

反省は多くある一方で、このような知らない世界についての話を楽しく聞いてくれた生徒が多かったことや、写真や動画を食い入るように集中して見てくれる生徒たちの姿を目の当たりにし、学校と外の世界をつなぐ授業が少しはできたのではないかと感じた。そしてともに海外研修に赴いた方々と、そのような生徒の学ぶ様子を見守ることができたことはかけがえのない経験となった。

今回の授業をエッセンスとして、これからも様々な国語の授業で「共創」や「越境」の概念を用いて、生徒と一緒にさらに思考を深めていきたい。

参考資料・使用教科書：数研出版「論理国語」